読解の誤りの考察と指導

丹下省吾・加藤　剛・高橋恵亮・倉田有邦

Ⅰ 趣　　旨

高等学校の英語学習において，生徒が最も多くの時間を費すのは読解作業であり，また恐らく最も骨折るのも読解力をつけることである。わが国英語教育の究極のねらいが読解力の養成に重点を置くものとすれば，その一番大きな練習の場は高校段階であり，その指導もそれだけ重要であると考えられる。

過去数年間，本校英語科では，英語の基本の力の養成に研究の焦点を合わせて，中学校の発音および語法の指導を取り上げて来た。高校英語はその応用である。最小限度に題材を限定した中学段階に比して，高校の題材，ことに読解の材料は無限とも思われるほど拡がっている。適切な指導法といっても，別に画期的なものを生み出そうとするわけではないが，多少なりとも，少ない労力で効果的な学習ができるような指導方法を考えて行きたい。

Ⅱ 経　　過

昨年度の「学習困難点の分析」で，高等学校英語の読解部門を語句，構文，内容という三つの面から考察した(本校紀要第六集参照)。これは，われわれが日常の指導にあたって経験する生徒の学習困難事例を整理し一般化した，いわば骨子である。しかし，いうまでもなく，読解作業において生徒が示す抵抗は，一つ一つの語句が異なるごとく多種多様であって，整理され公式化されたもののみをもって指導の材料とすることはできない。どのような語句や文に対してどのような反応を示すかを具体的に摑むことが大切であろう。

たまたま，本年度および明年度にわたって，国立附属校連盟高校部会の外国語部門で「テストに表われた誤りの原因調査」という共通研究題目をとり上げているので，それを兼ねて，その読解の分野を調査するために，高校一年に対して一連の読解テストを実施した。これによって得た結果を考察し対策を考えたのが現在までの研究報告である。

テスト問題を作成するにあたってわれわれは次のような方針を決めた。

1. 名詞とその後位修飾語句との関係の理解を調べる。
2. 後位修飾の種類を11に分けて問題を作る。11種類とは，前置詞の句，不定詞，現在分詞，過去分詞，関係代名詞主格，同所有格，同目的格，前置詞つき関係代名詞，関係代名詞省略，関係副詞，形容詞である。
3. 被修飾語が主語である場合と主語以外の要素である場合との両方を調べる。
4. 上の条件にあてはまる短文を諸テキストから選ぶ。
5. 原則として，上のそれぞれの形が二回ずつ調べられるように問題を用意する。例えば，前置詞を含む句（形容詞句）が名詞を後から修飾する場合，その名詞が文の主語である場合と主語でない場合との例文各2であるから，前置詞の句に関して計4問，11種類の形については総計44題となる。
6. 解答はすべて筆答で英文和訳とする。
7. 使用する語はできるだけ生徒の既習のものであるように心がけ，未習であると思われる語には註を附して語義を知らせるなど，語彙的な意味でなく構造の把握を調べる。

ここで，われわれが何ゆえに調査のねらいを名詞を後から修飾する形にしぼったかについて述べておかなくてはならない。冒頭に記したように，昨年度整理した読解の困難点を語句，構文，内容の三つに分類した。語句とは，個々に分離されたものがそれぞれ持つ意味の理解を示し，構文とは語句の結びつきにおいて生ずる意味の把握の過程，程度を示し，内容とは日本語との関連において英文が表わす意味を判断する態度を示したものである。もちろんこの分類が絶対的なものでもなく，また三者を全く切り離して扱うこともできないが，焦点をある程度しぼるためにこの研究では構文を選んだのである。複雑な文の読解過程は，修飾要素と被修飾要素の分解，組立の連続である。その中で名詞の修飾関係をとり上げたのは，これが文構造の骨組に最も近いものの一つであるという理由によるものであり，後位修飾を扱ったのは，それが日本語の修飾語の語位と逆であり而も前位修飾より遥かに多くの型を

もっているからである。また，被修飾語が主語である場合とそれ以外の場合とを考えたのは，特に主語を後から修飾する場合に述語動詞が主語と分離されることによって構文把握が困難になることを予想したからである。読解活動の分析の型は他にもいろいろあり，ねらいとするポイントも多く残されているが，それは今後の問題である。

（表・その１）が，作成した問題である。

（表・その１）

1. All things out of doors are waking from their long sleep.
2. Through the newspaper people in one part of the world may know what people in other parts of the world are doing.
3. They go to see the fine buildings with their wonderful paintings.
4. One of the interesting features of shopping streets in Japanese cities is the use of English signboards by most shops.
5. The only way to enter some countries is to sail up the rivers.
6. At last the time came for Hans to decide what to do.
7. Every man has a right to do what he likes in his house.
8. The poor man had no money of his own to buy with.
* 9. The airplane flying high up in the sky looked like a little bird.
10. Where do people living in large cities often grow flowers?
11. Here and there you would find red Indians living in the log houses or tents.
12. Many kinds of cotton goods exported from Japan are sent to various countries in Asia.
*13. The man killed on the street was an old Englishman.
14. "Impossible" is a word found only in the dictionary of fools.
15. I saw a big bird called Roc.
16. People who travel on land are thankful for these signs which guide them.
17. A train that goes a long way without stopping uses less coal than one that stops at every station.
18. All those who love Nature she loves in return.
19. Then his eyes met those of a dying soldier who was lying on the ground close by.
20. The boy whose work is finished may go out and play.
*21. A river the banks of which are covered with trees runs through the city.
*22. This is the house the roof of which was broken by the storm.
23. A barber is a man whose business is to cut hair.
*24. The lesson which the little animal had taught the king was never forgotten.
25. So the English language which we speak is really made up of words from many languages.
26. Lucy is a girl whom there were none to love.
27. The best place in which we can learn good manners is home.
28. The girl with whom we went on a picnic got too tired to walk.
*29. It is very pleasant to be able to speak the language of the people among whom you are living.
*30. They returned to the town from which they had come.
*31. All we have done for ourselves is very little.
32. The first thing a baby does is to cry when he is hungry or ill.
33. The clover was the best food they had ever had.
34. He was punished by the family he lived with.
35. The time has come when we must say good-by.
36. The hotel where our family spent this summer vacation stands by the side of the lake.

*37. His brother was very idle. That is the reason why he left the village where he was born on the very day when he buried his father.
*38. The leaves there were beginning to turn red.
39. A book full of pictures is enjoyed even by children.
40. Do you know any place famous for its scenery?
41. This is an opportunity too good to be lost.

* は考察にとりあげた問題，下線部ははねらいどころを示す。

この問題の構成は先に述べた11種類の修飾要素をそれぞれ順に含んでいる。1～4が前置詞の句（うち1～2が主語修飾，3～4がそれ以外の名詞の修飾。以下の問もこれに準ずる），5～8不定詞，9～11現在分詞，12～15過去分詞，16～19関係代名詞主格，20～23所有格，24～26目的格，27～30前置詞つき関係代名詞，31～34関係代名詞省略，35～37関係副詞，38～41形容詞である。なお当初の問題作成方針として，各項目4題，計44題を予定したが，一題中に二個の項目が含まれたものがあったり適当な例題が見当らなかったりしたために問題数は予定より少なくなった。この研究では厳密な数値を見るのではなく誤答の例を見るのが目的であるので，問題数の不均衡をわれわれは重要視しなかった。

このテストを高校一年生に対し第二学期に三時間をかけて実施した。

Ⅲ 考　　察

解答の処理は，まず1～41各問の答案を，ねらいとする部分のみに関して正否を調べた。そして各問毎に受査者数(100名弱）に対する誤答率を出した。修飾の形から見ると，関係詞全般が悪く，特に所有格および前置詞つきの関係代名詞が悪かった。主語修飾と他部分修飾との間には，諸条件の異なる故であろうが，有意の差はなかった。出来の良かった問題（誤答率約20%以下）は1，2，8，27，34，39であり，悪かった問題（誤答率約50%以上)は3，7，9，13，18，19，21，22，23，24，26，29，30，31，37，38，41である。ところが，これらの出来の悪い問題の解答を調べてみると，修飾被修飾関係を摑むのにかなり異質の要因が入って誤答を誘発したと考えられるものが幾らかあった。例えば4，で 'paintings' という語の意味が予想に反して判っていなかった。これが判らないと，機能語である 'with' の意味がとれず，従って修飾部分が誤って解される。われわれが註を附した以外の語で，このような困難のゆえにねらいとする箇所まで影響している例はこの他にも見出された。こういう語義的なもの，その他副次的な要因のために，出来の悪いものの数題をここでは割愛して，9，13，21，22，24，29，30，31，37，38について誤答例の著しいものを考察することにする。（表・その2）がその主な例，およびそれに対する考察である。

（表・その2）

9.a)「飛行機が空に高くとんでいった時(いる時は，いると，いるので）小鳥のようにみえた。」
分詞構文と解した誤りである。分詞の前に comma があるかないかで見分けることが必要。ただし両者の区別がつけ難い場合もある。
b)「飛行機が空に高くとんでいるのは小鳥のようにみえた。」
主部全体を Nexus のようにとったもので，日本語流に頭から訳して行こうとする習慣の表われである。修飾する部分(分詞)と，される部分との関係が判っていない。
13.a)「その男が道で殺したのは年とった英国人であった。」
これも主部全体を Nexus のように解した誤りで，過去分詞 killed が過去形と同形であることがこの誤答を誘発している。勝手に語を結びつけて強調構文を作り上げたものである。
b)「その男は道で年とった英国人を殺した。」
過去分詞のとりちがえは a) と同じであるが，'was' の存在も無視されている。
21.a)「木々におおわれた川の堤防」
'of' つき関係代名詞の所有格の意味を見落し，最初の二つの名詞を複合語にとった誤りで，この形の修飾関係が判っていないし，機能語に対する不注意も見出される。
b.「木々におおわれた川」
'bank' という語を意識的あるいは無意識的に

訳さなかったもので，全文の輪廓を摑んだ態度は悪くないが，使用されている各語に対する配慮に欠ける。

22.a)「あらしによって破壊された屋根の家」
全体の摑み方は前問の b) と似ているところがあるが，やはり語がどのように文の他の部分と結びついているかの理解が不十分である。

b)「あらしによって破壊された家の屋根」
前問の a) と同じ型の誤り。

24.a)「その小さな動物が王に教えられたところの教訓は」
完了形と受動態とのとりちがえによって主客転倒している。

b)「小さな動物が王様を教えた授業（課，学習）は決して忘れなかった。」
'lesson' の語義の誤認によるものかもしれないが，文脈があいまいになってしまっている。

29.a)「あなたが住んでいる人々の中の言葉」
前置詞と目的語との関係が判っていない。関係代名詞の用法も理解が不徹底である。

c)「あなたが住んでいる人々の間で言葉を話す」
先行詞を落して 'among' 以下を副詞句とした独断的解釈。

30.a)「かれらは来たところから町へ戻った。」
関係節を単なる副詞節と見なした。'which' を先行詞と別視して漠然と 'place' ぐらいに考えている。

b)「かれらは町から来て町へ帰っていった。」
関係節の形容詞としての機能が判っていない。

c)「かれらは以前来たことがある町へ戻った。」
'from' の意味を考えていない。'come' を 'been' の意味にとってしまった。

31.a)「すべて私たちがしたこと」
'all' を副詞のようにとった誤りであり，考えようによっては正解に似ているが明確ではない。先行詞と contact clause との関係を見抜いているとはいえない。

b)「みな私たちは」

c)「我々のすべてが」
'all' を 'we' と関連させた誤り。こういう誤りをすると，主語を別に作り出さなければならない。

37.(1)

a)「なぜかといえば」

b)「その理由は」

c)「…だからです」
三者とも，表現は異なるが同じ意味を示している。'the reason why' を 'because' と混同している。関係副詞 'why' と先行詞 'reason' の関係が意外に判っていない。

(2)

a)「埋葬した時に」
先行詞 'the day' を無視している。

b)「埋葬した時その日に」
従属節が関係節であることに気付かず，接続詞に導かれる副詞節と解している。表わされた邦訳文の不合理を意識しない。

38.a)「(there の訳がない)」
なぜ 'there' の訳を落したのか了解に苦しむが，この語が単なる anticipatory use で訳語に表われない場合が多いのでここでも見過ごされたのではなかろうか。

b)「葉があった」
'there were' と続けた誤りで，この結果他の部分は捏造に終っている。

以上，個々の場合を考察して来たが，それらをまとめてみると大体次のようになる。

(1) 総じて英語の基本語法の知識が不十分である。

中学校で一通りは紹介される重要な文法事項，すなわち，関係代名詞，分詞，前置詞と目的語，完了形，受動態等々が判っていない。特に所有格関係代名詞の節，前置詞つき関係代名詞の節の修飾機能の理解が足りない。

単語の機能あるいは用法についての理解が不十分または不注意である。例えばきわめて簡単な語，of，the などを軽く見過ごしたり，動詞の自・他動の別を明確にしない例が多い。

語形変化の意味に無頓着な場合も散見される。複数語尾の s を見落したり動詞の現在，過去形の変化に気づかなかったりする。

語順に対する感覚がない。英語での語順の重要性は改めて強調するまでもない。'The man killed the tiger.' と 'The tiger killed the man.' の意味の相違は語順のみが作り出すものである。

(2) 単語の持つ意味の知識が不足している。

これは，この調査のはじめに意図したように今回の対象から除外したものであった。それにも拘わら

ず，誤答を検討する過程において，一つの短文の中で一箇でも未習の，あるいは意味をとりちがえた語があるとそれが全文の訳に大きな影響のある場合があるのを見出すことがしばしあった。思うに，英文解釈において，少数の未知の語があった場合，それが大勢に影響しないものと，その誤りでもって全体を壊してしまうもの —key word— とがある。例えば今回の問題で，先述の 3. の 'paintings'，7. の 'right' などは key words といえるものであったようだ。一つの単語の誤認が文脈全体を一変することは珍しくない。

(3) 文意を通そうとして独断的な訳文を作り上げる。

このことは(1)で指摘した無知識・不注意の結果であると思われるが，答案で常にわれわれが見出すものである。主な内容語を自己流に配置し結びつけるわけである。勿論こういう過程の中に，英語とは根本的に異なる日本語の語順の観念も作用しているのであろう。結局，全体を見ようとして部分を忘れる弊である。

(4) 英語を日本語に置き換えるだけで，文意を考えない。

前項(3)の反対の現象であるが，これまた最もありふれた誤りの型であり，(3)よりも悪い傾向ともいえる。やはり正確な文意あるいは語意が判らないためにこのような結果に陥るのであろうが，全くの誤訳とはいえないまでも全体の文意が把握できているとは考えられない訳文に出くわすこともしばしばである。実に奇妙な現象であるけれども，「英文解釈専用の日本語」というものがいつのまにか生徒の頭に芽ばえ，こびりついてしまっているのではないかとさえ思われる。日本語の作文だったら絶対にそのようなことを言うはずはないのに，英文和訳においてはそれを使って涼しい顔をしているし他の者も何とも思わない。これはかなり大きな問題で，どう対処すべきかは英語科だけの課題ではないが，とにかく注目すべき現象だと思う。'you' を，どんな context においても「あなた」としか訳さないなどは，最も些細だがありふれた一例である。

Ⅳ 指　　導

上の調査に基いて指導の仕方を再検討したわけであるが，調査の結果を総体的に見れば，われわれが日頃感じていることを一層つよく裏付けてくれたにすぎない。読解の材料は範囲が大きく，個々の語句をとり上げてもそれに対する学習者の反応は千差万別で，このことは今回の調査でも教えられるところが多かったが，大体においては目新しいものではない。従って次に記す留意事項は従来心がけて来たことが殆どであるが，さらにこの調査で感じたことを加えて，今後考え出される改善の資としたい。

(1) 語，句

1. それぞれの意味を正確に理解させる。

◦できる限り文脈の中でその語句の意味が生きて理解されるようにする。そうすれば一つの語が持つ幾通りもの意味の区別を知らしめるのに有効である。

◦contrast によりその意味を正しく覚えさせる。

That is because～

That is why～

2. 語彙の保持，増大をはかる。

◦文脈の中で記憶させる。

◦広く読む機会を与える。プリント，副読本等の補助教材は十分必要で同一語句に何度も出会うようにする。

◦単語の整理によって派生語へ注意を向ける。

◦小テストを頻繁に行って記憶の機会を設ける。

本年度の中等教育研究協議会（昭和36年6月，於本校）で，単語の意味の記憶の度合について研究の一部を発表したが，その例によると，高校一年生がその一年間に学習した新語は，平均8割忘れ去られる。この研究はいずれまた別の機会に発表する予定でいるが，とにかく，中学段階を終えて高校へ入った生徒の中には，新語の大群に追い廻されて収拾がつかなくなる者が少くない。読解の最小単位である単語は，文構造と共に最大要素でもある。

(2) 文構造

1. 中学の基本語法を高校初段階で確実にする。

◦誤答の考察のまとめ(1)に述べたように，主な文法事項，語形変化，語の機能，などに格別の注意を払わせる。

◦文の構造的意味を考えさせる。

◦diagram によって文構造を理解させる。

◦contrast により文構造のちがいを知らせる。

I never heard Italian spoken.

I never heard Italians speaking.

The book is written in English.

The book written in English is ～.

◦上級になると記号，とくに comma の持つ意味に気をつけさせる。これは，複雑な文が挿入句などをはさんで，一見文脈が切れているように思われるが実は続いている場合のことで，この種の構造が英語には極めて多い。

(3) 内　容

1.　大意を摑む練習を多くする。

○extensive reading あるいは rapid reading の機会を設ける。(1), (2)の intensive reading に対するものであるが，言語本来の目的からすればこの方が先行すべきものともいえよう。高校二年の前半までに easier stories を読ませるのもよいし，家庭作業とするのもよい。辞書を引くことを控えて大筋を摑む練習をさせる。

○aural comprehension で大意を摑ませる。読解とは稍々性質がちがうけれども，リーダーの時間に読解教材を利用してよくやることであり，とかく逐語的になり易い弊を改めるのに効果があると思われる。

2.　常識で内容を検討させる。

○訳文である和文をもう一度考え直してみる習慣をつける。矛盾があれば誤訳である。

3.　訳語を洗練させる。

○誤ってなくても awkward な文ならば日本文としておかしくないものにするよう心がけさせる。もちろん美文にせよというのではない。

「何物も私に，より深い印象を与えなかった。」

日本語に再表現をすることについて注意すべきは，英文和訳は高等技術であって，殆どの場合われわれはそれを意識せずに和訳という過程を進めるのであるが，実は，英語の知識と同時に日本語の選択能力，構成能力をも必要とするものである。難解な英文に接する時は，同様に困難な日本語への再表現という作業が要求されているということを忘れてはならない。教師は終始英文を扱っているので何とも思わないが，多くの生徒にとっては，これは大変な負担であることを理解しておくべきである。その理解の上に立った指導が望ましい。また，英文和訳は読解の方法の一つにすぎない（もちろん最も大きな部門であろうが）ということも心にとめておくのがよいと思う。

Ⅴ　結　　び

今回扱った事項は，名詞と後位修飾語句であったが，調査をしてみると多くの副次的事項が現われて，そのどれもがわれわれの注意をひいた。むしろこういう具体的な生徒の反応を知ることこそわれわれにとって最も有益であり指導の目標を示してくれるものである。しかし，今回の主題は，限りなく拡がる材料のほんの一角である。今後は別の面を，あるいは別の方法で拓いてみたい。そして，一つの型をなした，一連の流れをもった読解指導の体系を生み出して行きたいものと考えている。